



文化財センター

京都府京田辺市

興戸遺跡第13次・第14次発掘調査概報

薬

1998

京田辺市教育委員会

京都府京田辺市

興戸遺跡第13次・第14次発掘調査概報

1998

京田辺市教育委員会



興戸遺跡遠景（東から）



第13次調査地（上が北）



第14次調査地（南東から）

序

今回ここに報告するものは、京田辺市のほぼ中央部に広がる興戸遺跡の概要報告です。

興戸遺跡はこれまでに12回の発掘調査が行われ、本市を代表する大きな遺跡であることがわかってきています。ことに奈良時代では、遺跡地内を歩いていった古代山陽道に関係をもつような区画や官衙を推定させるような遺構・遺物などがみつかっています。

今回の調査は、共同住宅の建設にともなって実施したのですが、奈良時代の井戸跡や道路の側溝などがみつき大きな成果をあげることができました。

最後になりましたが、調査にあたって北尾富士夫氏・関係機関をはじめ多くの方々のご協力・ご指導をいただきましたことをお礼申しあげるとともに、今後とも埋蔵文化財に対するご理解を賜りますようお願い申し上げます。

平成10年3月

京田辺市教育委員会

教育長 村田 新之昇

例 言

- 1 本書は京田辺市教育委員会が行った興戸遺跡の第13次及び第14次発掘調査の概要報告である。
- 2 調査は北尾富士大氏の依頼を受け、平成8年度・9年度に現地調査を行い、平成9年度に報告書作成を行った。
- 3 調査地の地番は次のとおりである。
第13次調査地 京田辺市 興戸 犬伏 23番地の1
第14次調査地 同 八木屋 17番地の3
- 4 現地調査は平成8年7月12日から10月2日まで（第13次）と、平成9年7月30日から10月3日まで（第14次）行った。
- 5 調査組織は次のとおりである。
調査主体……京田辺市教育委員会（平成8年度は田辺町教育委員会）
調査責任者……京田辺市教育委員会 教育長 吉山 勝平（平成8年12月31日まで）
村田 新之昇（平成9年1月1日から）
調査指導……京都府教育委員会・京都府立山城郷土資料館・京田辺市文化財保護委員会
調査担当者……京田辺市教育委員会 社会教育課 鷹野 太郎
同 上 鳥居 幸一（平成9年3月30日まで）
同 上 五百髯 新一（平成9年5月1日から）
調査事務局……京田辺市教育委員会 教育次長 中川 勝之
同 参事 古川 章
同 社会教育課 課長 奥田 清
同 課長補佐 小西ケイ子
調査参加者……小野香織・梶野依紀・鞍元玉緒・半良聡弘・白敷三佐代・阿知波琢土
河村能宏・柴崎晶子・横西美津子・原クニ江・小原志奈子・佐藤美穂
- 6 調査を実施するにあたり、北尾富士大氏には多人のご協力を賜った。記して感謝します。
- 7 調査期間中及び本書を執筆するにあたり、次の方々よりご教示を得た。記して感謝します。
（順不同・敬称略）
高橋美久二・菱田哲郎・山中章・國下多美樹・清水みき・宮崎康雄・久保哲正・橋本清
伊野近高・森島謙雄
- 8 本書の執筆・編集は鷹野・五百髯が行った。
- 9 表紙カットは、第13次調査で出土した黒書土器の文字を用いた。

本文目次

1. はじめに	1
2. 位置と環境	2
3. 調査経過	6
4. 第13次調査	8
(1) 調査概要	8
(2) 遺構	10
(3) 遺物	16
(4) 小結	30
5. 第14次調査	31
(1) 調査概要	31
(2) 遺構	33
(3) 遺物	38
(4) 小結	44
6. まとめ	46

挿図目次

巻頭図版1 興戸遺跡遠景（東から）	
巻頭図版2 第13次調査地（上が北）	
巻頭図版3 第14次調査地（南東から）	
第1図 調査地位置図	1
第2図 主要遺跡図	3
第3図 周辺地形図	5
第4図 第13次調査 作業風景	6
第5図 第13次調査 現地説明会	6
第6図 第14次調査前風景（南から）	7
第7図 第14次調査 作業風景	7
第8図 第13次調査 中世面遺構図	8
第9図 第13次調査トレンチ 上層断面図	9
第10図 第13次調査 古代面遺構図	折込み
第11図 中世遺構面（南から）	11

第12図	古代遺構面（南から）	11
第13図	SX1382（南から）	12
第14図	SX1382 遺物出土状況（西から）	12
第15図	SE13113 実測図	13
第16図	SE13113 上面（南から）	14
第17図	墨書土器出土状況（中心の上器）	14
第18図	下層土器出土状況（北から）	14
第19図	基礎部木柱出土状況（南から）	14
第20図	SB13114（南から）	15
第21図	SX1384 実測図	16
第22図	SX1384（北から）	16
第23図	SD13150・SX1382 出土遺物	17
第24図	第13次調査 遺物実測図(1)	18
第25図	SE13113 出土遺物	19
第26図	SE13113 墨書土器	20
第27図	第13次調査 遺物実測図(2)	21
第28図	第13次調査 遺物実測図(3)	22
第29図	SB13114 出土土師器	23
第30図	第13次調査 遺物実測図(4)	25
第31図	出土須恵器	26
第32図	第13次調査 遺物実測図(5)	27
第33図	石鏃実測図	28
第34図	第13次調査 遺物実測図(6)	29
第35図	第14次調査 中世面遺構図	31
第36図	第14次調査トレンチ 土層断面図	32
第37図	中世遺構面（南から）	33
第38図	古代遺構面（北から）	34
第39図	SK1416（南から）	34
第40図	第14次調査 古代面遺構図	折込み
第41図	SK1406 実測図	35
第42図	SK1406（北から）	35
第43図	SD1404・SD1405 断面図	36
第44図	SD1404・SD1405（東から）	36

第45図	SD1404 土器出土状況（東から）	37
第46図	SK1414・SK1415 実測図	37
第47図	SK1414・SK1415（北から）	38
第48図	第14次調査 遺物実測図(1)	39
第49図	SK1416 出土遺物	40
第50図	SD1401・SD1404 出土遺物	40
第51図	SK1406 出土遺物	41
第52図	遺物実測図(2)	42
第53図	SB1411 出土遺物	42
第54図	第14次調査 遺物実測図(3)	43
第55図	石楯実測図	44

1. はじめに

興戸遺跡は京都府京田辺市田辺から興戸にかけて位置する南北約900m、東西約500mに及ぶ規模をもつ遺跡である。過去12回の調査では、縄紋時代晩期から中世にかけての各時期の遺構・遺物が見つかり、京田辺市の古代を知る上で貴重な資料を提供している。

第13次調査は、遺跡地内におけるマンションの建設に伴い実施したもので、北尾富士夫氏から発掘調査の依頼を受けた。現地調査は平成8年7月12日より開始し、10月2日に終了した。

第14次調査は、先の調査地に隣接するマンションの建築に伴うもので、同じく北尾富士夫氏から発掘調査の依頼を受けた。現地調査は平成9年7月30日から開始し、10月3日に終了した。

なお土地所有者の北尾富士夫氏をはじめ、関係者の方々、猛暑の中、労苦を厭わず調査に参加された作業員・学生諸氏、その他多くの方々のご協力によって今回の調査が行われたことをここに記して感謝の気持ちとしたい。



第1図 調査地位置図 (S = 1 : 20,000)

2. 位置と環境

京田辺市は京都府南部に広がる南山城平野のほぼ中央にあり、平野の中心を北流する木津川の左岸に位置する。市の東部は平野で、緩やかに標高を下げながら木津川に至る。西部はいわゆる京阪奈丘陵で、大飯層群と呼ばれる砂礫層を中心に構成される。丘陵は流れ出る小河川が開析谷や扇状地を形成し、起伏の激しい地形を見せる。また小河川の多くは平野部において、人為的な改修も手伝い天井川という、南山城独特の景観を作り出した。しかし時代とともにこの天井川は、交通や開発の障害となり、切下げられて徐々に失われつつある。

興戸遺跡は京田辺市のほぼ中央にある興戸地区に位置する市内でも有数の遺跡である。国道307号線バイパスが遺跡北寄りを東西に横断し、府道八幡木津線がほぼ中央を南北やや西偏に縦断し、遺跡の北西隅で国道と交差している。東には鉄道が南北に走り、JR・近鉄が併走する北限になっている。

今回の2か所の調査地は府道と鉄道に挟まれ、国道に北接したところに位置している。地形は緩傾斜地で、西から東に向かい傾斜をみせる。

興戸遺跡を取巻く歴史的環境を概観すると、現在までの調査で、弥生時代中期にまで溯ることができる。

弥生時代中期では、興戸遺跡の西側丘陵上の田辺城跡下層から、竪穴住居や方形周溝墓が見つかった。後期では、隣接する丘陵上に方形台状墓(興戸5号墳)が築かれ、竪穴住居もみつかった。これは市の南部でみつかった、田辺天神山遺跡、飯岡遺跡に続く集落の発見であり、先記の中期住居とあわせて、南山城の高地性集落を考える上で注目される遺構である。東側の平地では、大切遺跡から、中期の溝や庄内へ布留式にかけての溝がみつかり、後者の溝の遺物には東海地方産の土器も含まれている。

古墳時代前期になると、西の丘陵上に興戸古墳群が築かれる。1号墳は全長約24mの前方後円墳。2号墳は直径28mの円墳で、寿命寺山古墳として古くより知られている。主体部は割竹形木棺を納めた粘土槨で、副葬品として内部から内行花文鏡・青玉・鉄形石・車輪石・石剣・鉄剣などがみつかった。墳丘外面には埴輪(家・円筒)の存在も認められ、典型的な畿内前期型の古墳であることがわかっている。

奈良時代に入ると、都から全国へ伸びる官道が整備され、京田辺の地には山陽道が設けられる。現府道がこの道を踏襲していると考えられ、このことは発掘調査により裏付けられつつある。西側の丘陵裾部には興戸院寺が建立される。伽藍配置などは未調査のため不明だが、現地では白鳳時代から平安時代初期の瓦がみつかった。



1. 興戸遺跡 2. 興戸廃寺跡 3. 興戸古墳群 4. 興戸丘陵遺跡 5. 田辺城跡 6. 田辺遺跡 7. 竹ノ脇遺跡
8. 興戸宮ノ前遺跡 9. 大切遺跡 10. 鍵田遺跡 11. 南垣内遺跡 12. 東神尾遺跡 13. 伝道林遺跡 14. 稲葉遺跡
15. 新遺跡 16. 田辺天神山遺跡 17. マムシ谷窯跡 18. 下司古墳群 19. 普賢寺跡 20. 飯岡遺跡 21. 飯岡車塚古墳
22. プロプロ山古墳 23. 薬師山古墳 24. トヅカ古墳 25. 飯岡横穴 26. 古屋敷遺跡 27. 田中遺跡 28. 山崎北方遺跡
29. 直田遺跡 30. 山崎古墳群 31. 宮ノ下遺跡 32. 三山木廃寺跡 33. 桑町遺跡 34. 屋敷田遺跡

第2図 主要遺跡図 (S = 1 : 25,000)

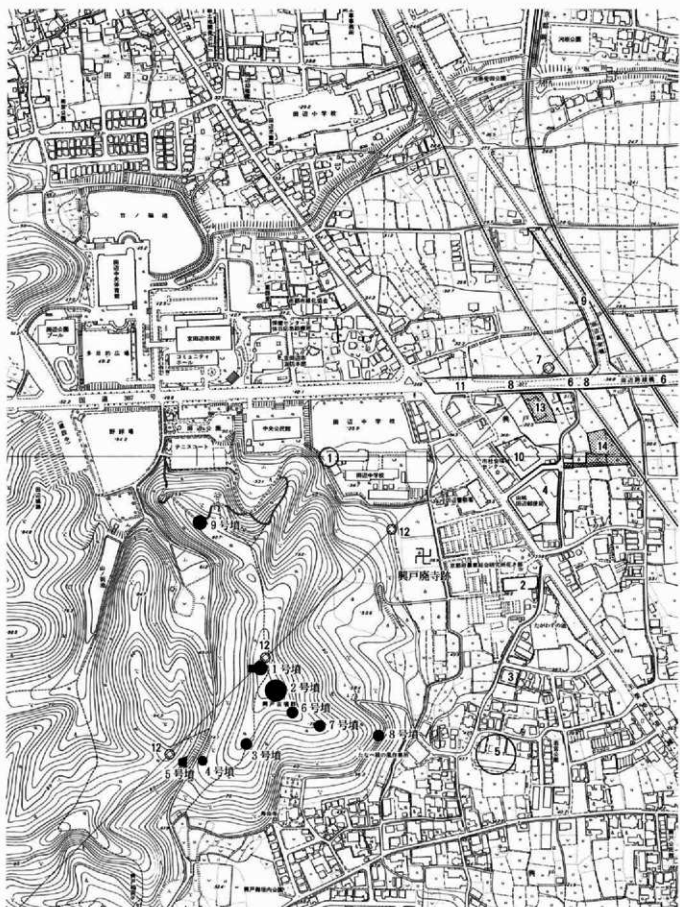
中世になると田辺氏の居城と考えられている川辺城が築かれる。かなり古く位置付けられる石垣、戦国末期に焼失した礎石建物跡などがみついている。

興戸遺跡はこのような環境に存在しており、昭和50年（1975）に行われた第1次の発掘調査より、数えて12回の調査が行われている。調査では縄紋時代晩期を初めとする、各期にわたる成果を上げており、なかでも著しいのは奈良時代から平安時代にかけての時期である。

奈良時代では、山陽道と考えられている府道が遺跡の中心を通り、その東西で多くの遺構が見ついている。代表的な成果として、西側では、ほぼ正南北の方位を持ち、規格性の認められる掘立柱建物跡群がみつかり（第2次調査）、綴瓦郡衝とも目される。その北東である国道307号線バイパス建設に伴う調査（第6・8・11次）や市道建設に伴う調査（第9次）では、掘立柱建物跡、塀跡、柵列、溝、井戸がみつかった。また、遺物では、井戸から墨書土器や土馬・斎串や包含層から三彩陶器もみつかり、この時期の興戸遺跡の官衙的性格が強調される。

平安時代では、掘立柱建物跡（第2・6・8・9次）、溝、井戸（第10次）がみついている。第10次の井戸は縦板組みで、その内に直径約1mの木材を削り買った水滴をおくというめずらしい構造のもの。そして遺物では当時一般的ではなかった、緑釉陶器や灰釉陶器の割合が高いことが注目される。第12次調査では、基に伴っていたとみられる双鳥紋瑠花五花鏡がみつかった。奈良時代に続いて有力者層集落の存在が考えられ、京田辺市はもとより、南山城地域においても注目される遺跡であることがわかる。

今回の調査地は、国道307号線バイパスの南側であり、先の調査に続いた成果が期待されるところである。



第3图 周边地形图 (S = 1 : 5,000)

数字は奥戸遺跡調査次数

3. 調査経過

今回の興戸遺跡第13次・第14次の2度の調査は、遺跡地内でのマンション建設に伴い調査を行なったものである。調査地は2か所共に国道307号線バイパスに北接し、JR学研都市線の西側に所在している。以前行われたバイパスの建設に伴う調査では縄紋時代晚期から中世の遺構・遺物が確認され、とりわけ奈良時代から平安時代の遺構が顕著であった。今回も同時期の遺跡の存在する可能性が高い地区と考えられた。調査は建物の建設予定範囲をトレンチに設定した。レベル原点は兩次とも近鉄の東方のL=27.956mを用いた。また現地での実測はトレンチに合わせた任意の座標で行い、国土座標に交換している。

第13次調査 調査地は興戸大伏23番地の1に所在する。現地での調査は平成8年7月12日から開始した。トレンチは建物予定地に東西10m×南北30mで設定し、掘削・調査に入った。遺構面までの掘削は、表土から第一面（中世）直上までは重機により、以下は人力によ



第4図 第13次調査 作業風景

り行った。トレンチ内の排水溝の掘削では、完形に近い遺物などかなりの遺物が出土し、遺構の存在が予感された。

第1面では中世の耕作に伴う溝が縦横にのびており、これを完掘・記録の後、第2面の調査にかかった。第1面は良好な遺物包含層でもあり、その下にはビット群・溝・土坑など全域に古代の遺構が広がっていた。精査後、遺構の展開を知るため拡張の必要性が出、西側に約3m×10mの範囲でトレンチを拡張した。ここでもビット群、そして木枠組の井戸



第5図 第13次調査 現地説明会

などの遺構をみつけた。

調査が一段落した9月12日に記者発表を行い、続く9月14日に現地説明会を催した。更に井戸の調査では墨書土器がみつき、9月24日に再び記者発表を行った。その後南の一部を深掘、下層の確認をし、10月2日に調査を終了した。

第14次調査 調査地は興戸八木屋17番地の3に所在する。第13次調査地の南東約100mにある。現地調査は平成9年7月30日から開始した。トレンチは東西10m×南北28mで設定した。

第1面では中世の耕作溝がみつかった。完掘・記録作成の後、第2面の調査に入る。この面はトレンチの南が掘削前の段に準じて1段高くなっている以外は周囲より低い立地であり、様相の違いがある。遺構はまばらであったが、南段上からは東海産の土器がみつかった小土坑や飛鳥時代の土坑がみつかり、北半部では平行する溝群が、北端部では掘立建物跡・溝がみつっている。平行する溝群が古代山陽道に直交・平行する道の側溝であると結論し、9月18日に記者発表を行い、続く20日に現地説明会を催した。最後に北西と南でト



第6図 第14次調査前風景（南から）



第7図 第14次調査 作業風景

レンチの一部を拡張し、遺構の消息を確認・記録作成の後、10月3日に調査を終了した。

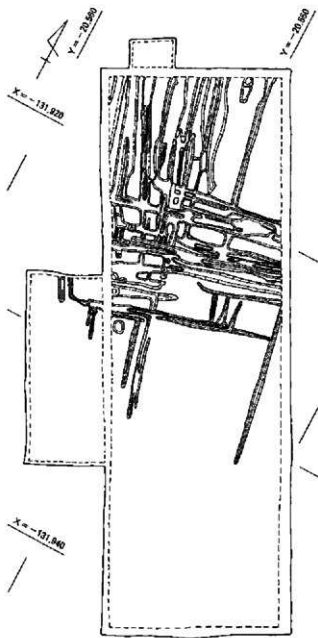
4. 第13次調査

(1) 調査概要

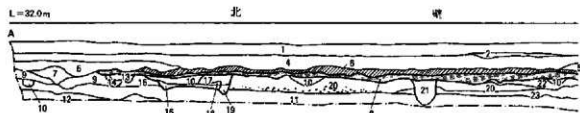
第13次の調査地の立地は、国道307号線バイパスのすぐ南で、府道・JRの中間に位置している。(過去の調査地では、第8次調査の9トレンチに接する。)地形は府道から東に向かい緩やかな傾斜をみせる。このトレンチの基本的な層序は上から耕作土、床土、淡茶色土・淡茶灰色砂質土(中世遺物包含層)、灰褐色土(古代遺物包含層)、淡褐色砂質土、以下粘土・砂礫互層が続く。

第1面では、中世の耕作に伴う溝が密集してみつかっている。中世におけるこの土地利用は広い範囲で見られ、従来の調査の成果でも同じような遺構としてみつかっている。溝の方向は北に対して約 10° ~ 20° 西偏している。

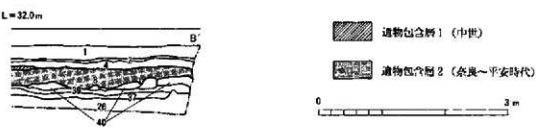
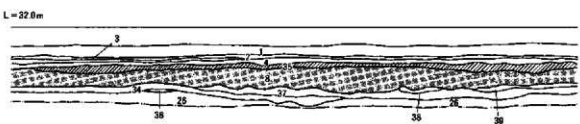
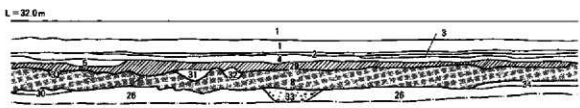
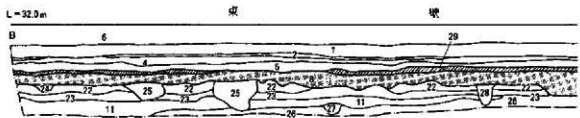
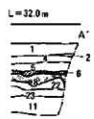
第2面は、良好な遺物包含層の下にあり、特に南側はより包含層が厚く、遺物が多くみつかっている。遺構面上では、トレンチ全域に濃密な遺構がみつかった。まず北から中央にかけては南北にのびる溝とほぼ全域からビットがみつき、南では東西方向の溝が数本、その下から自然流路と思われる太い溝状遺構・土器溜りがみつかった。南北方向の溝は2種類あり時期差がみられる。ビット群の内のいくつかは掘立柱建物跡になり、3棟の建物が部分的であるが復原でき一部には当時の柱根が残っていた。また建物の消息を知るため、西側部分を $3\text{m} \times 10\text{m}$ で拡張したところ、平安時代の庇をもった建物が



第8図 第13次調査 中世面遺構図 (S=1:200)



- | | | |
|-----------------|------------------|---------------------|
| 1. 黒色土 (碎作土) | 15. 灰褐色砂質土 | 29. 淡茶灰色砂質土 (遺物包含層) |
| 2. 灰色土 | 16. 黄土層 (灰多い) | 30. 淡茶褐色砂質土 |
| 3. 黄褐色砂質土 (粘土質) | 17. 淡黄灰褐色土 | 31. 淡茶褐色砂質土 |
| 4. 黄褐色土 (粘土質) | 18. 暗茶褐色土 | 32. 淡茶褐色砂質土 |
| 5. 淡黄灰色土 (粘土質) | 19. 淡黄灰褐色砂質土 | 33. 淡褐色砂 |
| 6. 黄褐色土 (遺物包含層) | 20. 淡黄灰褐色砂質土 | 34. 暗茶褐色土 (遺物包含層) |
| 7. 黄褐色粘質土 | 21. 黒褐色粘質土 | 35. 暗茶褐色砂質土 (遺物包含層) |
| 8. 灰褐色土 (遺物包含層) | 22. 淡黄褐色粘質土 | 36. 明灰色砂 |
| 9. 暗褐色砂質土 | 23. 淡黄褐色砂質土 礫まじり | 37. 茶褐色砂質土 |
| 10. 淡茶褐色砂質土 | 24. 灰褐色砂質土 | 38. 暗茶褐色砂質土 |
| 11. 淡茶褐色粘質土 | 25. 灰褐色土 | 39. 暗茶褐色粘質土 |
| 12. 灰褐色砂質土 | 26. 黄褐色砂質土 礫まじり | 40. 淡黄灰色粘質土 |
| 13. 淡黄褐色土 | 27. 灰色砂質土 | 41. 暗褐色砂 |
| 14. 灰色砂質土 礫まじり | 28. 暗茶褐色土 | |



第9図 第13次調査トレンチ 土層断面図

復原できた。さらに奈良時代の木枠組の井戸がみつかり、内部からは底部外面に墨書がある須恵器杯のほか完形の須恵器杯などもみつかった。

南部の自然流路では落ち込んだ部分が上器溜りとなって残っていた。上層には上に飛鳥時代の上器がまとまって出土し、下層には砂層の堆積がみられる。さらに流路下層の確認のため深掘したところ、布留式土器を含んだ溝状の落込がみつかった。

(2) 遺 構

今回の調査では溝・掘立柱建物跡・井戸・土壇・ピットなど約200の遺構がみつかり、遺構には確認順に調査次数を付けた番号を与えた。主に奈良時代から平安時代にかけてのものが多く、以下主要な遺構を取り上げ、概要をみたい。

SD13150 SX1382の下層でみつかった溝である。東西に長い。内部からは布留式土器のカメがみつかった。

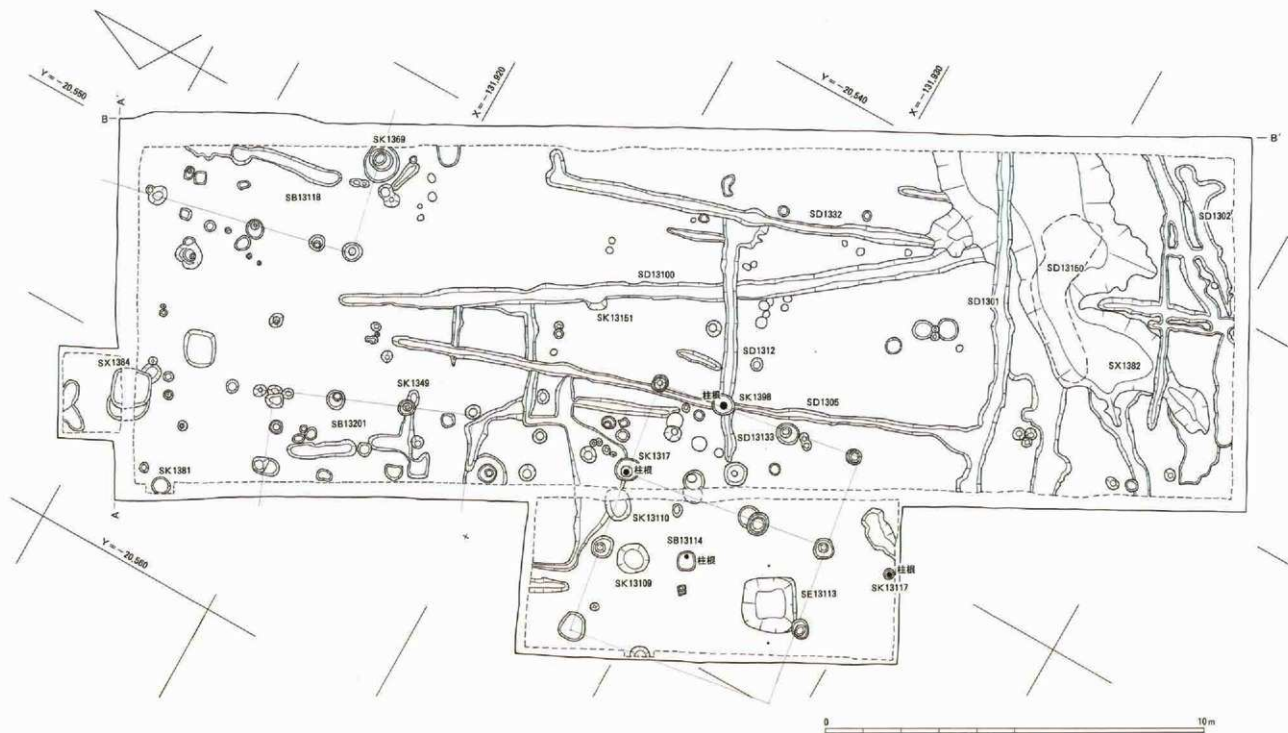
SX1382 トレンチ南部にある、周囲に比べ大きく落ち込んだ窪地状の遺構で、自然流路の一部と思われる。内部には砂質土・砂が堆積し、東西約7m×南北約4mの規模をもつ。遺構内上層は上器溜りで飛鳥時代のものを中心とした上師器・須恵器が大量にみつまっている。主な器種としては上師器では杯・碗・皿・カメ・鍋、須恵器では杯・カメがみつかり、特に上師器の種類が多くみられ、残り状態が良いものが多い。下層には砂層が続き、SD13150がある。

SD1302 トレンチ南端の東西方向の溝である。幅約0.4m、長さ約4.0mを測る。遺構内から丸底の須恵器ツボの底部、ミニチュア土器の高杯などがみつかった。

SD13100 トレンチの中央をほぼ南北に縦断する、幅0.4～0.6m、長さ17m以上の長い溝で、北に対し約N33°Wの傾きをもっている。溝内からは上師器の高杯、須恵器の杯などがみつまっている。その方向および遺物から奈良時代初期の溝である。

SE13113 拡張部でみつかった井戸。大きな礫を含む黒褐色の土が浅く円形に入り、平瓦が立った状態でみつかった。その下から灰色粘土が詰まった方形の土坑がみつかり、井戸として調査にかかった。調査は内側を半割し断面を確認しつつ掘り下げ、最後に掘方を断割った。

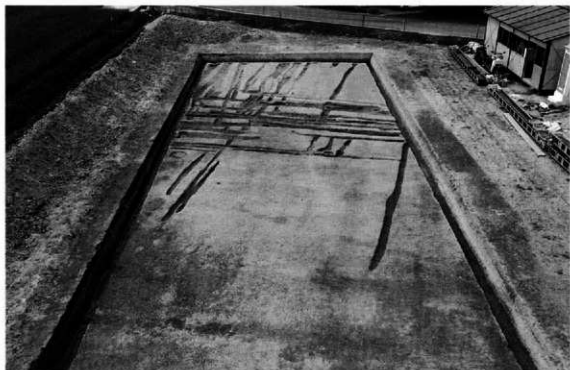
井戸は方形の木枠組で、掘方は一辺が約1.4mの隅丸方形のプランをもち、壁はほぼ垂



第10図 第13次調査 古代面遺構図

直に掘られる。底部は平らで、深さは約0.6mを測るが後述の井戸側の残り具合からみて、本来もっと深いものであったと考えられる。

井戸底は掘方より更に一辺約0.7m、深さ約0.1m掘り込み、湧水のろ過のために砂質土



第11図 中世遺構面（南から）



第12図 古代遺構面（南から）



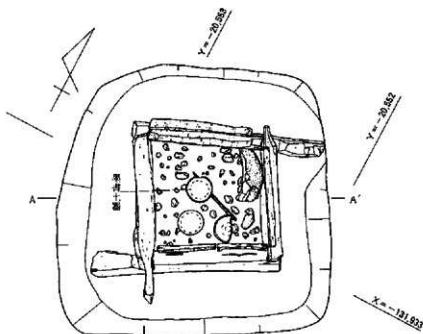
第13図 SX1382 (南から)



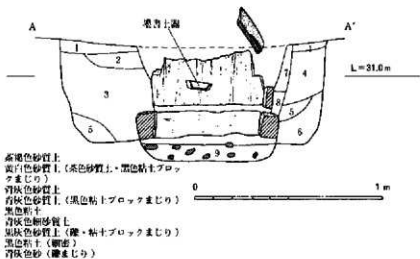
第14図 SX1382 遺物出土状況 (西から)

と、大きめの礫（栗石）を敷き詰めており、その上に井戸枠の基礎（胴木）として、転用した0.1m角の柱材を「井」型に組み、設置している。柱材にはそれぞれ2か所の切込みを入れ、南北の柱の切込みを上向きに、東西の柱を下向きに組み合わせている。基礎部の

上には厚さ約0.05 m、幅約0.7 mのこれも転用された板材が井戸側として置かれ、その外側に裏込めとして、砂質土・粘土を結めている。井戸側の上部は朽失しているが、本来は横棧で固定していたと考えている。またこれら構造材は全て榿材と思われる。



井戸内部の埋土は大きく5層に分けることができる。最下層は砂まじりの暗灰色粘土で井戸底の上に約0.1 mの厚さで堆積している。この上面



1. 高褐色砂質土
2. 黄白色砂質土(赤色砂質土・黒色粘土ブロックまじり)
3. 青灰色砂質土
4. 青灰色砂質土(黒色粘土ブロックまじり)
5. 黒色粘土
6. 青灰色細砂質土
7. 黒灰色砂質土(黒・粘土ブロックまじり)
8. 黒色粘土(緻密)
9. 青灰色砂(礫まじり)

第15図 SE13113 実測図

器の杯、棒状の木材がみついている。第4層も同じく暗灰色の粘土で、木片が多く含まれている。この層の上下には灰色の砂屑がブロックで入る。第3層も同系色の粘土であるが、キメの細かい砂を多く含んでいる。この層の上面の中心では底部外面に「樂」と墨書された須恵器の杯が正位でみつかった。第2層礫まじり灰色粘土の中からは、須恵器のカメ・蓋、木材などの遺物が入り、井戸側の外にも入り込むことから廃棄時に結めた層である。最上層は暗褐色の砂質土が大きな礫を含んで堆積している。この層には瓦が立って入っていたほか、椀・盤など土師器がみつかった。井戸でみつかった遺物は概ね奈良時代の中期的ものである。

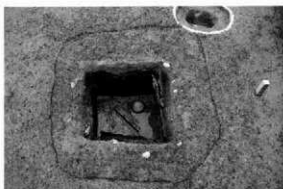
この井戸からは、中心からみつかった黒書土器のほか、桃などの種もみつかっており、



第16図 SE13113 上面(南から)



第17図 墨書土器出土状況(中心の土器)



第18図 下層土器出土状況(北から)



第19図 基礎部木拵出土状況(南から)

直上の第2層は人為的に埋めた層と考えられ、井戸の廃棄に伴い何らかの祭祀が行われたと思われる。

SK1381 トレンチ北西隅にある、直径約0.5m、深さ約0.13mの円形の土坑である。排水溝にかかり、掘削中に完形に近い大小の須恵器の杯がみつかった。

SK13151 トレンチのほぼ中央にある土坑。径約0.55m、深さ約0.07mの隅丸方形をしている。SD13100を切るかたちでみつかった。内部からは土師器・須恵器がみつかった。

SK13109 西拡張部にある土坑。径約0.75~0.85m南北にやや長い円形で、中心に径約0.6m、深さ約0.55mの柱穴を持つ。内部からはこぶし大の石と須恵器の蓋、土師器の甎などがみつかった。

SK13110 西拡張部にある、径約0.65m、深さ約0.13mの円形の土坑。内部から土師器の皿・カメなどがみつかった。

SD1301 南部の溝で、西側でSD1305が直角に交わる。SD1382の上層を東西に走る。幅

0.4m～0.6m、長さ9m以上である。土師器・須恵器がみつかった。

SD1305 トレンチ西端の南北方向の溝。幅約0.3m、長さ約15.5m、北に対しN15～20°Wの傾きをもち、南端でSD1301と直交する。遺物は須恵器の杯・蓋がみつかった。一部をSB13114に切られている。

SD1332 SD1305の東側5mにあり、SD1305と平行する溝。幅約0.4m、長さ約10.5mを測る。

以上の3本の溝は、その方向から同時期のものと思われる。切り合い関係からSB13114が建てられる以前に廃絶していたと考えられる。

SD13133 トレンチ中央でみつかった東西方向の溝。SB13114より古い。幅は約0.2～0.3mで、SD1305を切り、東のSD1312に繋がる。土師器の杯などがみつかった。

SB13201 北西部にある掘立柱建物跡の一部。東西1間(2.1m)以上×南北3間(5.4m)の規模をもち、南北方向の建物。北に対して約22°西に傾く。柱掘方から出土した遺物は少なく、掘方のひとつであるSK1343で土師器のカメがみつかった。



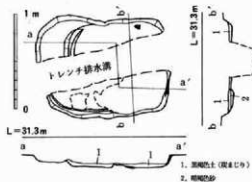
第20図 SB13114 (南から)

SB13118 トレンチ北東隅の掘立柱建物跡の一部。南北2間(5.4m)以上×東西1間(2.5m)以上の規模をもつ。建物は北に対し約15°度西に傾く。建物を構成する柱掘方から良好な遺物はほとんどみつからず、唯一南側掘方のSK1369から須恵器のカメがみつかった。

SB13114 西および西拡張部にわたる南北棟の掘立柱建物跡。東西2間(4.4m)×南北3間(5.6m)の建物で、その東側に東西1間(2.5m)×南北3間(5.6m)規模の庇をもっている。建物の方向は北に対し約10°西の傾きを持つ。建物を構成する柱掘方は径約0.6~0.7m、ほぼ円形である。庇部分の柱穴には径0.12mの柱の一部(高さ0.5m分)が残っていた。庇南端の柱穴からは9世紀後半の薄手の土師器皿などがみつかった。

3棟の建物跡は、いずれも平安時代のもと思われる。建物の方向から、SB13114が最も新しい時期のものと考えている。

SX1384 トレンチ北端にある土坑。東西1.4m、南北1mの隅丸方形のもの。壁には固く焼けしまった土が巡り、底部付近には炭片を密に含む土層が堆積している。内部堆積土からは土師器小片がみつかったが、時期を確定するものはみつかっていない。みつかった層位から、平安時代を下らないものと考えている。



第21図 SX1384 実測図



第22図 SX1384 (北から)

(3) 遺物

第13次調査では、コンテナにして約18箱の土器に加え、井戸枠・柱根などの木製品や石鏃・鉄滓・フイゴ羽口などがみつかった。遺物の大半は土器であり、そのほとんどを須恵器・土師器が占め、奈良時代初頭から平安時代にかけてのものが多く。

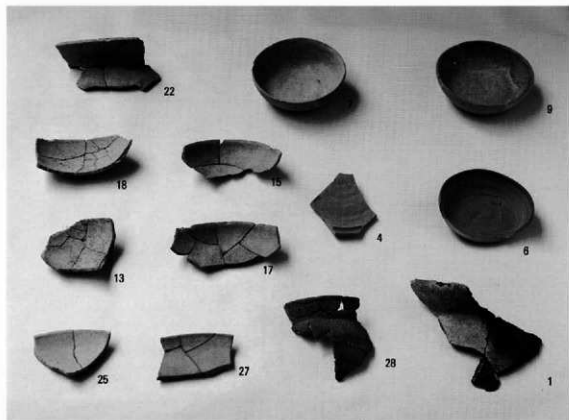
以下、図化し得た遺物を遺構別・遺物包含層・木製品に分けて配列し概観したい。

主要遺構の遺物

SD13150 (第24図1) 口径13.6cmを測る、布留式土器のカメである。口縁部は緩やかに

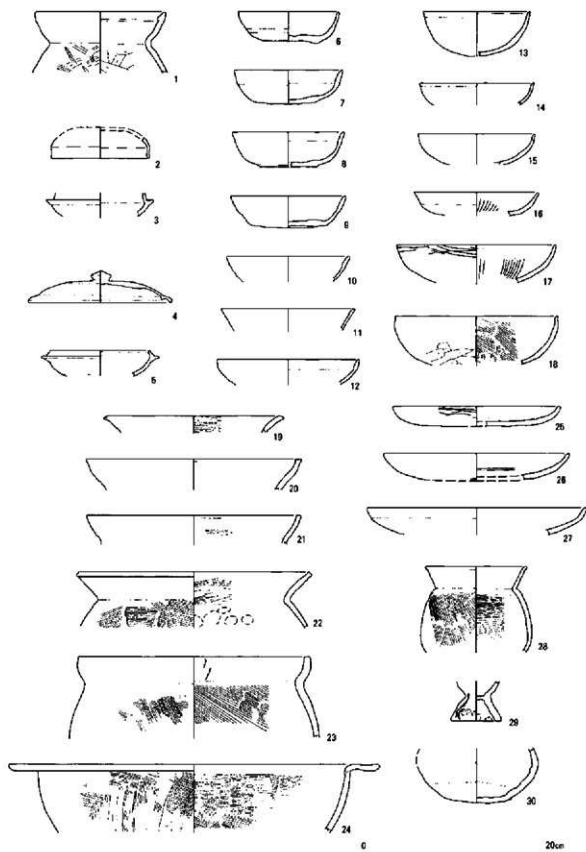
内彎し、端部を内側に肥厚させ、さらに上方に鋭くつまみあげる。胎土はやや密で砂粒を多く含む。体部内面はヘラケズリ、外面はナデられるもクタクメが残る。色調は表面が淡褐色、断面は黒色で体部半身には黒斑が付く。

SX1382 (第23図、第24図2~28) 2・3は古墳時代の須恵器である。2は杯蓋で径10.4cm、3は杯身で口縁端部を欠くため口径は判らないが、受け部の径は11.4cmを測る。4は須恵器の蓋である。端部内面にかえりを、頂部には宝珠つまみをもち、径は15.0cmを測る。5は杯身で口径10.6cmの短い立ち上がりをもつ。全体をロクロナデし、底部はヘラケズリを行っている。6~12は須恵器の杯である。口径は10.5~15.0cmで、残存部分からみると口縁部の調整はいずれもロクロナデを行い、底部はヘラケズリを行っている。また8は底部に粗いケズリによる低い段を持つ。



第23図 SD13150・SX1382 出土遺物

13~28は土師器である。13は口径11.3cm、器高約4.75cmを測る碗である。口縁部はヨコナデをし、端部は小さく外反する。14~17は口径12.1~16.7cmの杯である。口縁部はヨコナデし、底部はナデか不調整である。16・17は内面にヘラミガキによる一段放射状暗紋を施し、17は更に口縁外面に横方向のヘラミガキを行う。18は鉢で口径17.2cm、器高約5.6cmを測る。口縁部はヨコナデ、端部はわずかに外反する。体部外面はナデ、底部をヘラケズリする。内面は全体にナナメ方向を中心としたハケメが施されている。19~23はカメの口縁部である。口縁部の形状は内彎・直線的と差異があるが、調整は共通してヨコナデ、端



SD13150: 布留式土器カメ (1)

SX1382: 須恵器杯蓋 (2・4)・杯身 (3・5)・杯 (6~12)、土師器碗 (13)・杯 (14~17)・鉢 (18)・カメ (19~23)・鉢 (24)・皿 (25~27)・小型カメ (28)

SD1302: ミニチュア土師高杯 (29)、須恵器ツボ (30)

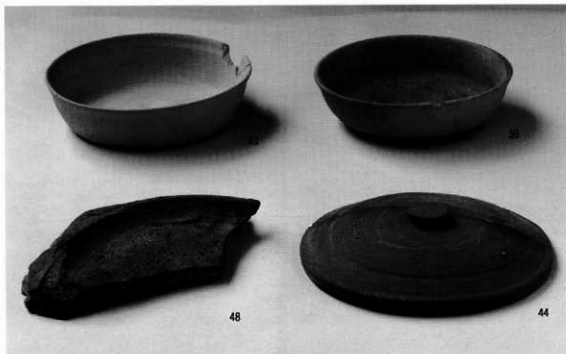
第24図 第13次調査 遺物実測図 (1)

部の面取りを行っている。19、21、22の内面にはヨコハケがされる。体部は残存している範囲で22は外面に間隔の短いヨコハケ、内面はユビ押え痕が残り、23は両面に細かいナナメハケが施されている。24は外径39.5cmの鍋である。上面にヨコハケをした口縁部がほぼ水平に巡る。体部外面にはハケメを施し、煤が付着する。内面は淡褐色で短い間隔のヨコハケがされる。胎土はやや粗く大きめの砂粒を含む。25～27は口径17.6cm～23.4cmの皿である。25の口縁部外面には横方向のミガキが施されている。28は口径10.6cmの小ぶりのカメである。口縁端部は外に折り返し気味につくる。体部は肩は張らず、外面にナナメハケ、内面には粗めで強いヨコハケを行う。

これらの土器は7世紀のもので、大半は7世紀後半から末のものである。

SD1302 (第24図29・30) 29は高杯型をした手づくねのミニチュア土器で上部を欠いている。脚部はハ字状に開き、ユビオサエ痕が両面に残る。30は丸底の須恵器のツボの体部である。外面全体に回転ヘラケズリされ、明確な稜がつく。また底部には焼成時の付着物が残っている。ともに7世紀。

SD13100 (第27図31～38) 31～33は須恵器の杯である。口径は9.9cm～12.4cm、器高は3.5cm～4.2cmで口縁部をロクロナデし、底部はロクロヘラケズリを行う。34～38は土師器である。34は口径12.7cmの杯である。口縁部を広くヨコナデし端部を外反させている。内面には一段放射暗紋が施されている。35は暗褐色の小ぶりのカメで口径13.4cmを測る。体部は頸部を中心に「く」の字をしており、外面にナナメハケ、内面にヨコハケが施される。36はカメの口縁部で口径19.0cm。ヨコナデされ緩やかに内彎し、端部を面取りする。淡赤



第25図 SE13113 出土遺物

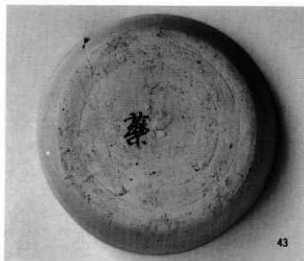
褐色をし、胎土には砂粒を多く含む。37は口径19.7cmの高杯の杯部である。胎土は密で砂粒・赤色粒子が含まれている。表面は摩耗が激しく調整は不明である。38は外径が32.0cmの鍋である。上面をヨコナデされた口縁部がほぼ水平に付く。体部の両面にはハケメが施される。

8世紀初頭のものともみられる。

SE13113 (第25・26図、第27図39~48) 39は井戸内部下層からみつかった完形のもので、約4.0cmの器高を持つ。内面及び口縁部はロクロナデで、口縁端部を緩く外反させる。底部外面はヘラのキズが少しあるが調整はされていない。色調は全体に淡灰褐色をし、特に内面の褐色が強い。二次的なものと思われる。

43は井戸内部上層からみつかった墨書のある須恵器の杯で、ほぼ完形で取上げられた。口径は14.2cm、器高3.7

39~42は須恵器で口径13.55cm~18.7cmの杯であ



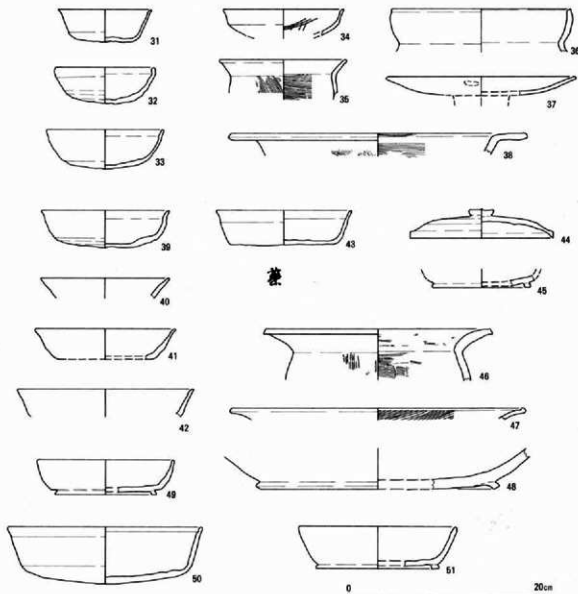
第26図 SE13113 墨書土器

cmを測る。いわゆる箱形の杯で、白灰色を呈し、胎土は密で細かい砂粒が多く含まれる。底部は平らで、内面はナデにより丁寧に仕上げられ、外面は粘土ヒモ巻き上げ痕がはっきりみえ不定方向のナデが散見でき、その中央左に「薬」と墨書がある。この土器は井戸の中心に近い位置から正位でみつかった。

44は須恵器の蓋で、頂部に偏平した宝珠つまみを持つ。井戸内部上層からみつかった。45は杯の底部である。小さな破片であるが、見込み上面に黒色の膜状のものが付着していた。これは漆であると思われる、漆の受け皿として使われたものであろう。46は口径23.9cmの土師器のカメで、大きく外へ開いた口縁部はヨコナデされ、内面全体にはヨコハケが、体部外面にはタテハケがされる。47は口径30.6cmの土師器高杯の杯部。大きく外反した口縁端部を内側に折りかえす。内面には細かい放射状暗紋が施されている。48は、土師器の盤で上部を欠いているが、口径35cm~40cm程度のものと考えている。復原でき得なかったが、同一固体と思われる破片には把手があり、高台・把手をもつ盤であることがわかる。器厚も1.0cm程度と厚く、胎土はやや粗く白粒・砂が多く含まれている。全体に赤褐色を呈し固く焼き締まっているが、表面は摩耗し調整は平明である。

8世紀中頃(平城宮Ⅲ新~Ⅳ)のものである。

SK1381 (第27図49・50) 49は口径14.4cmの須恵器杯、50は口径20.5cm、器高6.1cmの大



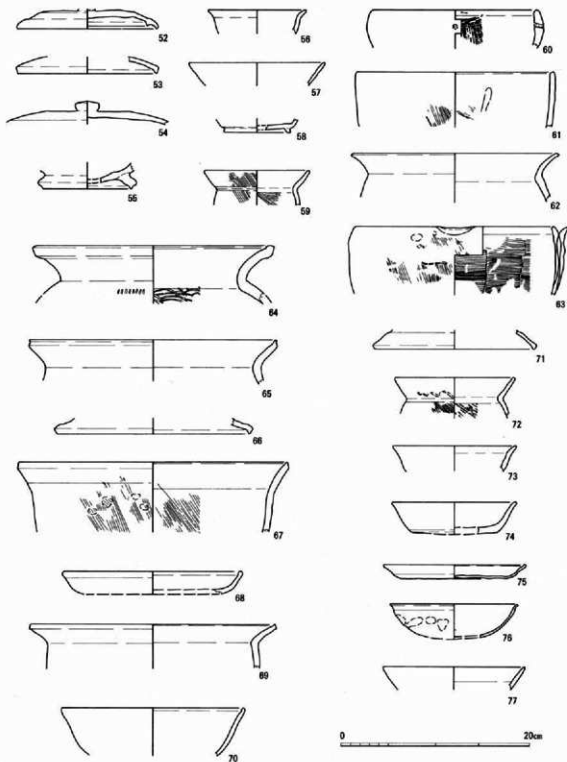
SD13100 : 須恵器杯 (31~33)、土師器杯 (34)・カマ (35・36)・高杯 (37)・罎 (38)
 SE13113 : 須恵器杯 (39~42・45)・蓋 (44)・墨書土器杯 (43)、土師器カマ (46)・高杯 (47)・盤 (48)
 SK1381 : 須恵器杯 (49・50)
 SK13151 : 須恵器杯 (51)

第27図 第13次調査 遺物実測図(2)

きめの須恵器杯である。底は中央が高く、直線的に立ち上がる口縁部で、口縁端部内側には1条の沈線が走る。8世紀のものである。

SK13151 (第27図51) 口径16.6cm、器高4.4cmを測る、須恵器の杯である。

SD1301・1305 (第28図52~63) 52~58は須恵器である。52~54は蓋で、いずれも宝珠つまみを持つ。52は内側に浅いかえりを持つもので、径14.9cmを測る。54は口縁部を欠いており、口径は不明であるが、頂部のつまみはやや偏平した宝珠つまみとなっている。55はツボで径9.3cmを測る高台を持つ。56は杯の口縁部で口径は10.2cm、ロクロナデをされ口端部を大きく外反させている。57、58はSD1305からみつかった、口径14.3cmの杯



SD1301: 須恵器蓋 (52~54)・ツボ (55)・杯 (56)・土師器カメ (59・62)・鉢 (80・63)・甌 (61)
 SD1305: 須恵器杯 (57・58) SB13118: 須恵器カメ (64) SB13201: 土師器カメ (65)
 SK13109: 須恵器蓋 (66)・土師器甕 (67) SK13110: 土師器皿 (68)・カメ (69)
 SD13133: 土師器輪 (70) SB13114: 須恵器蓋 (71)・杯 (73・74・77)・土師器カメ (72)・皿 (75)・輪 (76)

第28図 第13次調査 遺物実測図(3)

の口縁部と杯の高台部で、別個体である。

59～63は土師器である。59は小ぶりのカメで、口径は11.0cm、口縁部はわずかに内彎し端部を丸くおさめる。外面は口縁部から体部にかけて、内面は体部にナナメハケを行っている。60は口径17.4cmの鉢である。口縁端下約2cmに径0.5cm程度の孔があげられ、内面には強いハケメが施されている。61は甌で口径20.6cmを測る。ほぼ垂直に立上がり体部両面にはナナメハケがみられる。62は口径21.7cmのカメである。63は口径21.0cmの片口鉢で、緩やかに内彎する体部を持っている。口縁部には約4.0cmの幅で片口が作られている。体部は暗褐色で外面にはタテハケが密に、内面には短い間隔のヨコハケが施されている。

SB13118 (第28図64) 掘立柱建物を構成する柱穴からみつけた須恵器のカメである。口径は24.8cmを測る。体部外面には一部にタキキが残り、内面には同心円のタキキが残る。

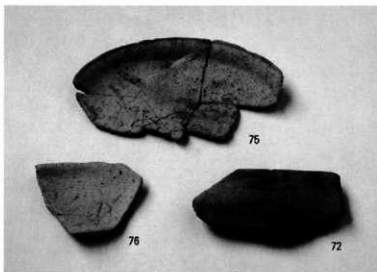
SB13201 (第28図65) 掘立柱建物の南東部の柱穴からみつけた土師器のカメである。口径は26.3cmで、端部を上方につまみ出している。

SK13109 (第28図66・67) 66は須恵器の蓋、67は土師器の甌の口縁部である。67は口径28.7cmで外側に緩やかに開く口縁部をもち、体部両面にナナメハケを施す。

SK13110 (第28図68・69)

68は口径18.8cmの皿で、ヨコナデで丸くつまみ出した端部を持つ。69はカメの口縁部で口径は26.1cmを測る。

SD13133 (第28図70) 土師器の杯で、口径は19.2cmを測る。口縁端部は微妙に外反し端部を内側に丸くおさめる。



第29図 SB13114 出土土師器

SB13114 (第28図71～77、第29図) 掘立柱建物を構成する柱穴群からみつけた土器である。71、73、74、77は須恵器の蓋・杯である。杯の口径は73、74が13.0cm、77は15.0cmとなっている。72、75、76は土師器である。72は小ぶりのカメで口径12.6cm、体部外面には細かいナナメハケが、内面には粗めのナナメハケが施されている。75は口径14.9cmの皿、76は13.4cmの碗、いずれも薄手のもので、ユビオサエ痕が残る。

9世紀後半を下限とするものである。

遺物包含層・排土の遺物

須恵器 (第30図78～104) 78～85は杯Aで、口径は7.8cm～15.3cmを測り、器高は4.0cmを

超えない。概ね調整は底部を回転ヘラケズリし、口縁部をロクロナデしている。86～92は貼付け高台を持つ杯Bで、口径は9.8cm～16.6cmを測る。92は底部のみであるが、外面に「十」のヘラ記号を持っている。93～97は蓋である。93、94は杯口の蓋、95～97は杯Bの蓋であると考えられる。

98は口径9.7cmを測るツボの口縁部。99は口径16.3cmを測る、緩やかに外反した口縁部外面に2条の沈線が巡るカメの口縁部である。内外面には自然釉が広く付着している。100はツボの底部である。

101、102はカメである。101は口径16.4cmのもので、外面全体にはカキメが施されている。102は口径32.8cmを測る。口縁部は大きく外反し、外側端部のすぐ下には1条の突帯が巡る。口縁部はナデられているが、外面には成形時のタタキの痕跡がわずかに残り、体部にはタタキメが残される。

103は口径23.9cm、器高14.45cmを測る平底の鉢である。全体はナデにより調整され、体部は緩やかに内彎し端部を更に内側に曲げる。104は踏脚足の台部、外径は25.6cm。残存部には三角形の接合剥離痕があり、復原すると約20本の柱により支えられた硯と思われる。台部はケズられた後、更に磨かれている。

施釉陶器 (第30図105～107) 105、106は灰軸陶器である。105は口径11.9cmを測る皿、106は高台部である。共に胎土は白灰色で、体部には薄い黄緑色の灰釉が施される。107は緑軸陶器の高台部である。高台部は底部を削出して作られ、体部内面には1条の沈線が巡る。須恵質の胎土を持ち、内面と高台外面まで緑色の釉が施される。

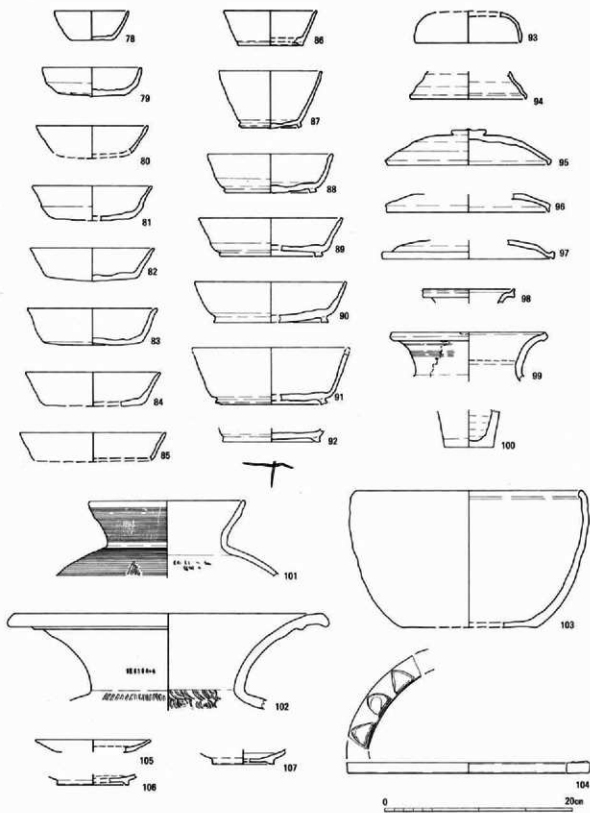
土師器 (第32図108～133) 108～112は口径13.0cm～21.0cmの杯である。108～110は緩やかに内彎する口縁部を持ち、端部を強くナデてヘコミをもたす。110は内面をヨコナデし、外面は口縁端部までケズリが行われている。111は体部から口縁部にかけて緩やかに湾曲し、端部を真上につまみ上げる。内面の調整は体部に一段放射状暗紋を施し、口縁部をヨコナデしている。外面の調整は口縁部は横方向のミガキを密に行い、口縁部下方から底部はケズリを行っている。112は開きぎみの口縁部を持つ。全体にヨコナデし、内面には二段放射状暗紋を施し、外面には横方向の粗いヘラミガキを行っている。

113～118は口径12.3cm～20.3cmを測る皿である。口縁部の立上りは比較的急で、口縁端部は内側に丸くおさまられる。主にヨコナデによる調整が行われ、遺存状態が良かった116は口縁部の外面に横方向のケズリ、内面には一段放射状暗紋を見ることができる。

119、120は碗である。119は口径13.0cmを測り、外面にはケズリが口縁端部まで行われ、内面はヨコナデにより調整される。120は断面三角形に近い高台を持つ。

121、122はボタン状のつまみをもつ蓋である。

123、124は多角形の脚部を持つ高杯の基部である。杯部見込み部は水平になっている。



遺物包含層：須恵器杯（78～92）・蓋（93～97）・ツボ（98・100）・カメ（99・101・102）・鉢（103）・円面甕（104）
 灰輪陶器皿（105・106）
 緑輪陶器碗（107）

第30図 第13次調査 遺物実測図（4）

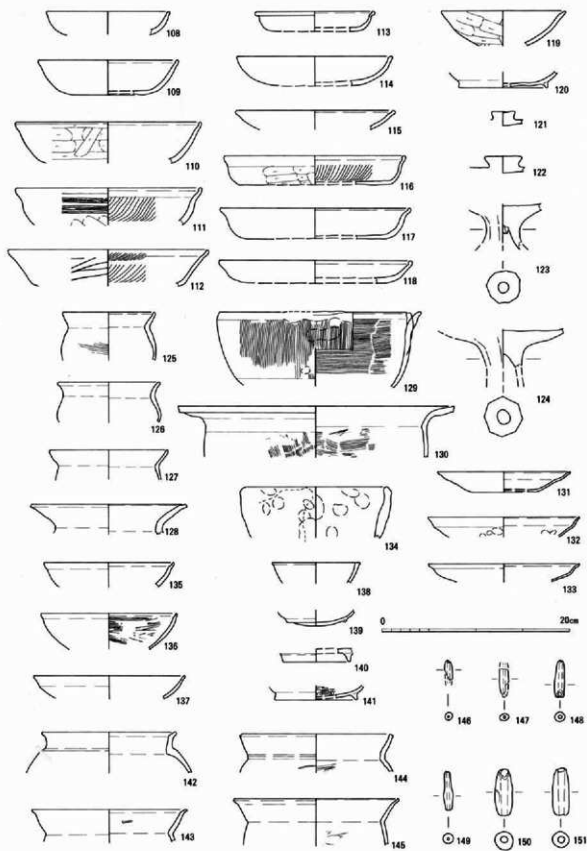


第31図 出土須恵器

123の脚部は湾曲ぐあいからみて短いものであり、断面は11面体である。124の脚部は下方に直線的に伸び、8面体の断面を持つ。

125～128は小ぶりのカメである。口径は9.8cm～16.4cmを測る。主にヨコナデされ、125の体部外面にはヨコハケが見える。129は口径20.2cmの片口鉢である。口縁部には推定幅約6cmの片口部を持ち、体部は緩やかに内彎する。体部外面はタテ、内面は細かいヨコハケが施される。口縁部はヨコナデされ、片口部付近にはユビオサエ痕が残る。130は口径29.4cmのカメで、ほぼ真直な体部と大きく外反する口縁部を持っている。体部外面にはタテハケ、内面にはヨコハケがされている。131～133は薄手の皿で、14.1cm～16.1cmの口径を持ち、0.2cmの厚さである。口縁部は大きく外向した体部を内に折り、外反させ、端部を微妙に上につまむ。底部付近にはユビオサエの痕が残る。

黒色土器 (第32図135～145) 136・137、139・140は内面のみ黒色、142は黒色ではないが、黒色土器に含まれると考えられる。以外のものは両面が黒色の土器である。135～141は碗である。口径は9.3cm～16.0cmで、136は内黒で、内面には横方向のミガキが行われている。139～140は貼付け高台を持つ底部である。139は丸い底よりも高い位置に高台が付いているもの。141は横方向のミガキを体部内面に持ち、見込部には長楕円形の暗文が密



遺物包含層：土器層杯(106~112)・皿(113~118・131~133)・碗(119~120)・蓋(121・122)
 高杯(123・124)・カマ(125~128・130)・鉢(129)・製塩土器(134)
 黒色土器碗(135~141)・カマ(142~145)・土鏝(146~151)

第32図 第13次調査 遺物実測図(5)

に施されている。142～145はカメである。142は、口縁部がほぼ直立し、端部を外に折る。体部は小さな肩を持っている。両面とも暗褐色で炭素を吸着していないが黒色土器であると考えている。143、145は外に開く口縁を端部付近で外へ折り、144は端部を面取りした口縁部を持っている。焼成の特徴として両黒のものは堅緻、内黒のものはやや軟質である。

その他の土器等（第32図134・146～151・第33図） 134

は製塩土器である。およそ口径は14.8cmを測る。胎土は粗く白色の砂粒が多く含まれ、厚くつくられる。両面にユビオサエ痕が残り、外面には黒斑が付いている。

146～151は土鍾である。大小2種類の規格がみられる。小型のものは長さ約4.0cmで、太さ（径）約0.8cm程度のもので、大型のもの150、151は長さ約5.0cm、太さ約2.0cm程度のものがみつかっている。焼成は小型がやや軟質、大型が軟質である。

152はサヌカイト製の石鏃である。小型であり、縄紋時代に属するものと考えられる。排土からの採集品である。

このほかには、乾元大宝や土馬、フイゴ羽口・鉄鏝がみついている。

SE13113の木製品

井戸側縦板（第34図153～157） 井戸側縦板で、材質は檜であると思われる。上半分は朽ちており、直立した状態でみついている。なお実測図は内面と横断面を載けている。153は北面の板である。横幅61.1cm、厚さ4.9cmの板材で、残存高は30.2cmである。154、155は西面の板で、南北2枚に分かれてみつかった。154は南側で横幅約26cm、厚さ約5cm、節があり孔があく。155は北側で横幅29.3cm、厚さ4.7cmの板材である。断面に見える年輪がほとんど繋がることから、1枚の板が割れたものと思われる。残存高は最大38cmである。156、157は南面の板で、同じく本来1枚のものと思われる。156は東側で横幅29.55cmで、厚さ5.0cmで、同じく西端が削られた痕跡があり孔があいている。

これらの板材は建築材等を転用したようで、本来は厚さ5.0cm、高さ40cm以上あったものと思われる。

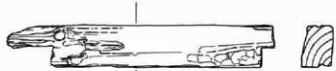
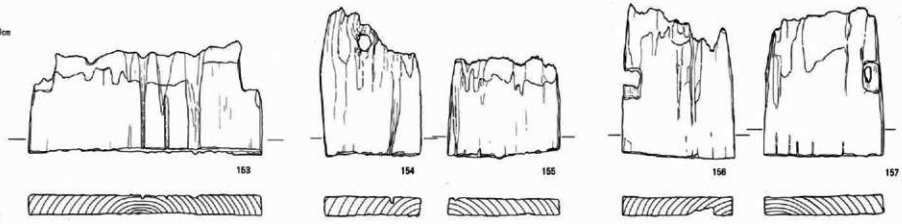
胴木（第34図158～161） 158～161は基礎部の枠組みで、檜と思われる柱材を転用している。4本が組合わされた状態でみついている。なお実測図は上面を上、内面と断面を載せている。

158は北側の柱材である。長さ約102cm、高さ13～14cm、厚さ約8cmを測る。東側に上部で13cm、下部で8cmの台形の切込みを持っている。西端は約7cmの幅で直角に切り取られている。159は南側の柱材である。長さ約105cm、高さ10～12cm、厚さ8～11cmを測る。西側は北柱材と同じように下部で8.5cmの台形の切込みがされる。この部分では壱状の工具



第33図 石鏃実測図

50cm
0



SE13113井戸枠：板材 北 (152)・西 (153・154)・南 (155・156)
柱材 北 (157)・南 (158)・東 (159)・西 (160)

第34図 第13次調査 遺物実測図(6)

で削った痕跡をみることができる。東端は7.5cmの幅で直角に切取られている。また東側内面も厚さを合わせるためか削られた道具痕が残っている。160は東側の柱材である。長さ約71cm、高さ11cm、厚さ8.5～10cmを測る。両端下方を切取り、南北の柱材に噛み合わせる。161は西側の柱材で長さ約90cm、高さ15cm、厚さ8～11cmを測る。両端下方を切取り、南北の柱材に噛み合わせる。

組合わせは、まず南北の柱材の切込みを上にし、互い違いに置き、両端を切取った東西の柱材の切取りを下にして置いている。それぞれの柱材の切込みや切取りの間はまちまちで、西側が最も広く、組合わせると少々歪な方形になる。

(4) 小 結

第13次調査では、中世面から耕作溝がみつきり、古代面からは古墳時代の溝を始め、飛鳥・奈良時代、平安時代の遺構と合せて、遺物では土師器・須恵器を中心に布留式土器、製塩土器、瓦器、陶磁器、土馬、土鍾、乾元大宝、石鏡などがみつまっている。

飛鳥時代の落ち込み SX1382からみつかった多量の土器は、西から東に緩傾斜する興戸遺跡の特色からも西側近隣で廃棄されたものが溜まったものと思われる。合せて時代は降るが奈良時代の井戸 SE13113では墨書土器が中心に置かれ、廃棄に伴い何らかの祭祀が行われたと考えられることや、包含層から土馬が見つかったことなどから、7・8世紀には、多量の土器を消費し、且つ祭祀を行う集団の存在が考えられる。その集落は調査地よりも西側に展開していたと考えている。

平安時代では、3棟の掘立柱建物が復原され、SB13114は東側に庇を持つ建物であることがわかっている。過去に北側の調査でも掘立柱建物が多く見つかっており、集落の範囲が広がった。またこの時期の遺物には、緑釉陶器・灰釉陶器といった一般集落にはみられない土器が出土し、地域の有力者層の存在が考えられる。

なお、柱穴等ビット群は、調査地の北部及び西部で多くみつかっており、建物跡はそちらに展開する様相である。現在のところ平安時代の建物跡3棟を復原できたが、さらに増える可能性も高い。

中世面からは、耕作に伴う溝群がみつまっている。11世紀以降の遺構・遺物が少ないことから、徐々に耕地化され、中世には完全に耕作地として利用されたようである。しかし包含層遺物には土師器・瓦器のほか、青磁・白磁がみつかっており、有力者の集落は近隣に存在していたと思われる。

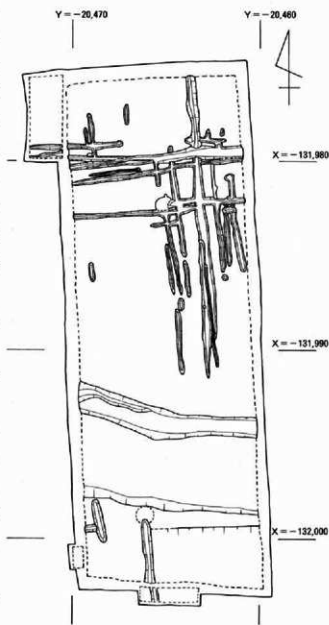
5. 第14次調査

(1) 調査概要

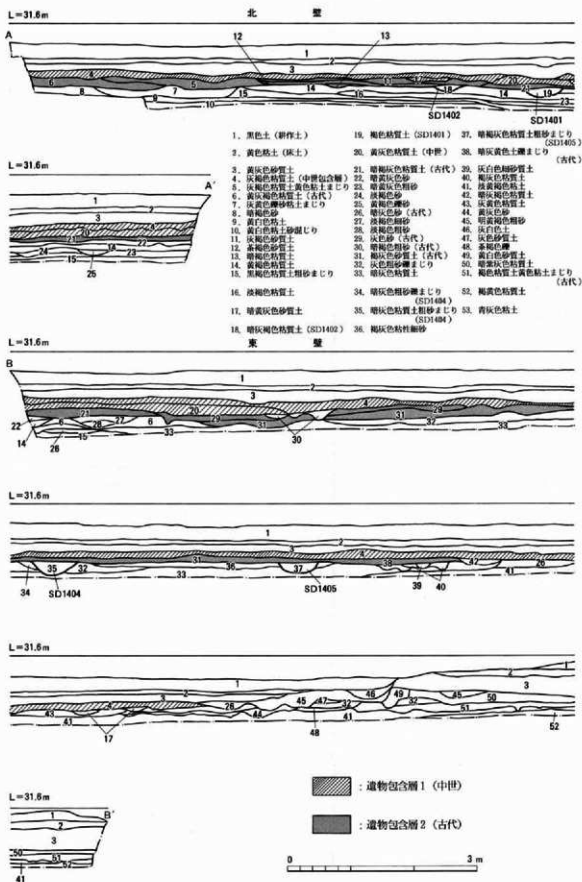
第14次の調査地は興戸八木屋17番地の3にあり、その立地は北側に国道307号線パイパスの高架が通り、すぐ東はJ.Rの学研都市線に接する。主要幹線道路は府道と国道があるが、どちらからも裏筋になっているので奥まった感がある。興戸遺跡は全体に標高が西高東低の傾向をもち、北西に約100m離れた第13次調査地と比べて0.4m程低くなっている。調査に先立つ試掘では、表土から約0.35~0.85mの深さで遺物がみつかった。

調査はまず生い茂った草刈りから始めた。トレンチ設定の後、重機による掘削を行い、表土から遺物包含層である灰褐色粘質土まで掘り下げたところ、南側が一段高く、掘削前に状態に準じていることがわかった。このトレンチの基本的層序は上から耕作土、床土、黄灰色砂質土、灰褐色粘質土(中世遺物包含層)、黄灰褐色粘質土(古代遺物包含層)、暗黄灰色粘質土(古代遺構面)、白色・灰色粘土となっている。暗黄灰色粘質土にポイントを置いて調査を行ったが、黄灰褐色粘質土の上面で中世の耕作溝とみられる溝群が見つかったので、まずこの面で精査、記録を作成した。溝は中央から北側でみつかった。その幅0.6m深さ約0.1m程度のものを中心に、幅0.3m深さ0.08~0.3mの溝が集まり、その傾きはN5°W程度となっている。

古代の遺物包含層でもある中世面下から、南北・東西方向の溝、小土坑・土坑などがみつかった。溝は奈



第35図 第14次調査 中世面遺構図 (S = 1 : 200)



第36図 第14次調査トレンチ 土層断面図

良時代と考えられているN33°Wの傾きを持つものと平安時代と考えられているN24°Wの傾きを持つものがあった。奈良時代の溝では、それぞれ平行する東西方向や南北方向の溝が見つかった。また南部段上には飛鳥時代の遺物が入った土坑や古墳時代前期の土器の入った小土坑が見つかった。平安時代では、南北方向の溝と掘立柱建物跡が遺物を伴って見つかった。

最後に土坑と建物跡の消息を確認するため、トレンチの一部を拡張し、記録を作成、更に下層遺構の有無を確認して調査を終了した。

(2) 遺 構

中世遺構面から約0.1m程度の遺物包含層の下には第2面である古代の遺構面がある。古墳時代から平安時代にかけての溝・ピット・土坑・掘立柱建物跡が見つかった。遺構は確認順に、調査次数を付けた遺構番号を与えている。以下時代順にみていきたい。

SK1416 トレンチ南西部隅で見つかった土坑。直径約0.6m、深さは0.37mである。上層と下層では規模・埋土に違いがみられる。上層から遺物はみつかっていない。遺物が見つかったのは下層で、東海地方西部産のS字状口縁をもつ台付カメが、横向きで上半分を欠いた形でみつかった。

SK1406 トレンチ南端で見つかった土坑。南北に少し長い不定形の平面形で、外径は南北約3.6m、東西約2.8mを測り、浅く緩やかに掘られている。その内側はさらに径約2.5m程の大きさで掘り込ま



第37図 中世遺構面（南から）

れている。土坑の内部は底一帯に土師器を中心とした土器が散らばり、上に土器を含む灰茶褐色粘土が入る。その上層に少し遺物を含む淡灰茶褐色粘土が灰色砂をはさみ堆積している。みつかった面では黒灰色粘質土が堆積しているが、遺物はほとんど含まれていない。断面の様子から、完全に埋没するまで時間差があるようである。

またほとんどの遺物は底部からで、散らばってはいたが個体ごとはまとまってみつまっている。主なものは土師器では鍋・カメ・片口鉢、須恵器は杯・大型の蓋などである。この土坑の性格ははっきりしていないが、遺物はおよそ飛鳥時代のものが多いようである。



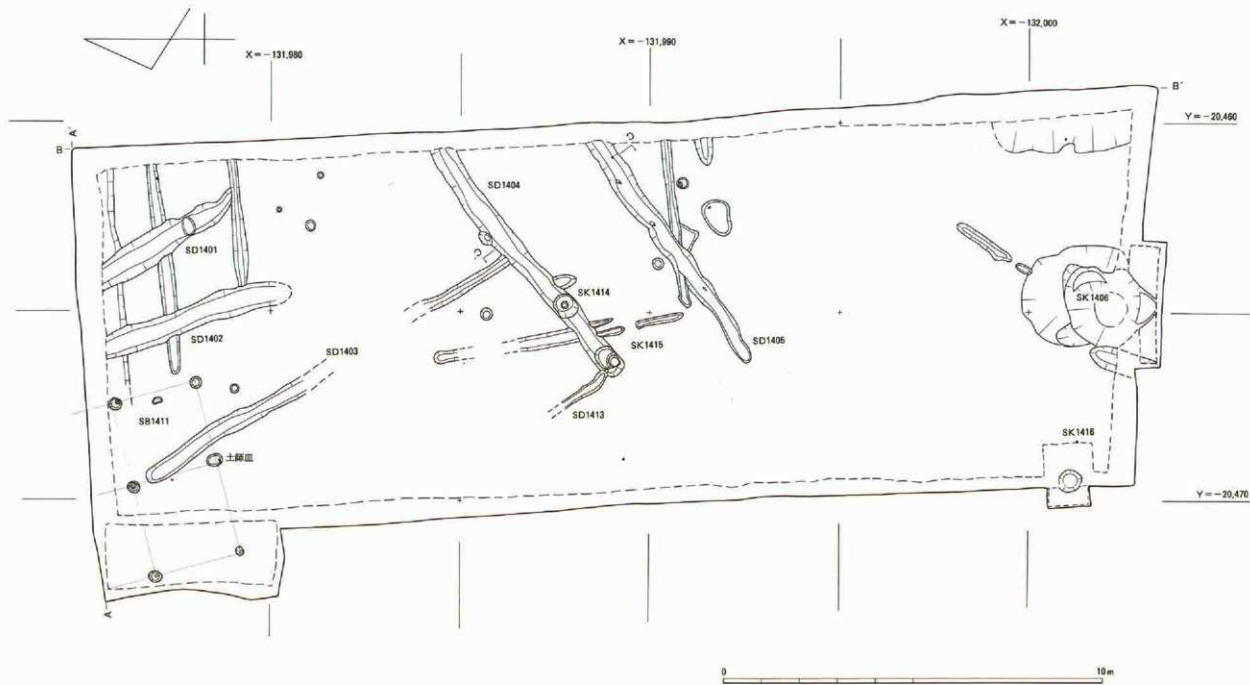
第38図 古代遺構面（北から）

SD1401 調査地の北東隅にある南北方向の溝で、幅は最大0.85m、深さは約0.18m、長さは4m以上である。この溝は北端がトレンチ外に伸び、南は急に狭まり中世溝に切れ終わっている。底部からは須恵器の蓋が見つかった。

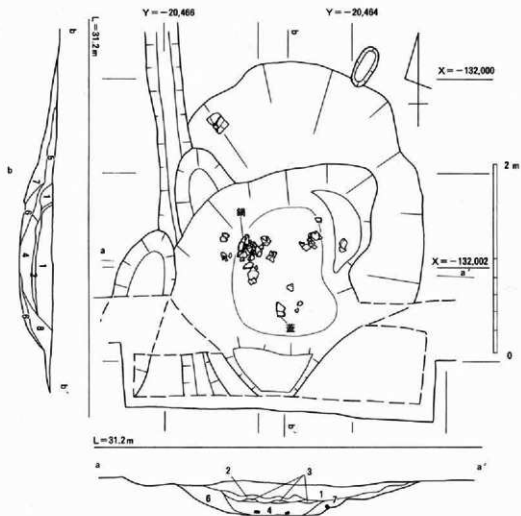


第39図 SK1416（南から）

SD1403 トレンチの西側の南北方向のびる溝で、南北に別れてみつかった。北端は



第40図 第14次調査 古代面遺構図



1. 黒灰色粘質土 2. 淡灰茶褐色粘土 3. 灰色砂 4. 灰茶褐色粘土砂まじり (遺物含む)
 5. 灰黄色砂 黒灰色粘質土ブロックまじり 6. 灰黄色砂 7. 黄灰色砂まじり 8. 暗灰色粘土

第41図 SK1406 実測図

トレンチ壁から約1m手前で終わり、南はSD1404に直交するようにとりつく。幅は約0.3～0.5mで深さは約0.15m、長さは11.2mである。みつかった遺物は少ないが、SD1401・1413と平行する方向(N33°W)より、奈良時代の溝であると判断した。

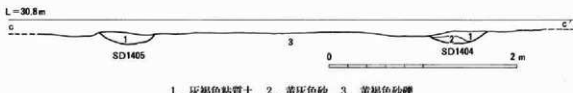


第42図 SK1406 (北から)

SD1413 SD1404西端から北にのびる溝。幅0.2m、長さ1.4m以上を測る。

SD1404 中央部にある東西方向の溝で、幅約0.6m、深さ約0.2m、長さ7.7m以上である。中央より始まり、東はトレンチ外に伸びる。東壁際の底部からは須恵器杯（4）と土師器杯（5）が見つかった。この溝の西端底からは後述の2基の土坑SK1414・SK1415が見つかった。

SD1405 同じく中央部にある幅約0.6m、深さ約0.15m、長さ7.2m以上の溝である。西はトレンチ中央から始まるが、さらに西に続いていたかは不明である。東はトレンチ外に続く。溝の底からは土師器のカメや高杯などの土器が見つかった。



第43図 SD1404・SD1405 断面図



第44図 SD1404・SD1405（東から）

この2本の溝は東西方向に平行に続き、溝の心々の距離3.2～3.4mを測る。その間の平坦部は奈良時代の道路で、溝はその側溝であると考えられる。その傾きはN57°Eで、この地域での古代山陽道の傾きと考えられる方向に直交している。

また、SD1401とSD1403・SD1413の南北溝の3本も平行し、1401・1403間は5m、1403・1413間は4mをそれぞれ測る。どのように組み合わせるのかよくわからないが、道路の側溝と考えられ、交差点が見つかったものと理解される。

SK1414 SD1404の西端近くの底部でみつかった隅丸長方形の土坑。長径0.65m短径0.5mを測り、中央に径0.2mの柱穴をもっている。深さは溝底から0.51m、

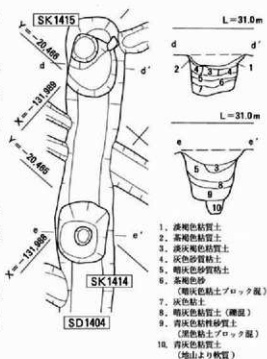


第45図 SD1404 土器出土状況（東から）

内部からは土師器のカメがみついている。

SK1415 同じくSD1404の西端底部でみつかった土坑。ほぼ同規格で西南隅に径0.3mの柱穴をもつ。深さは0.68mで、内部から土師器がみつかった。

この2基の土坑はSD1404と同時期または直前につくられていることや、同じ規模の土坑が他にみつかっていないことから、この溝に付随するものとみられる。道の建設工事（溝の設置）の際になんらかにご利用されたものであろうか。



第46図 SK1414・SK1415 実測図 (S=1:40)

SD1402 北部中央での北方向に流れる溝で、幅は約0.7m、深さ約0.2m、長さは4.8m以上である。この溝も北壁にあたり、南は中世溝により切れ消えている。その方向はおおよそN24°Wである。溝内部からは黒色土器カメ・土師器がみつかった。

SB1411 トレンチ西北にある掘立柱建物の一部で、SD1402に平行する。規模は東西2間(約4.7m)以上×南北1間(2.3m)以上の総柱建物と考えられる。柱穴の掘方はほぼ円形で平均して径0.3m程度、深さ0.2m前後のもので構成されている。柱穴からは、薄手の土師器皿が3枚重なり立った状態でみつかったほか、黒色土器・瓦・緑釉陶器・灰釉陶器など平安時代の特徴を備えた遺物がみつかった。



第47図 SK1414・SK1415 (北から)

(3) 遺物

第14次調査では、コンテナにして約6箱分の遺物がみつかった。そのほとんどが土器で、その他瓦・土鍾・石鏃が少量含まれる。土器は須恵器・土師器がその大半を占め、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、中国製磁器などがみつかった。

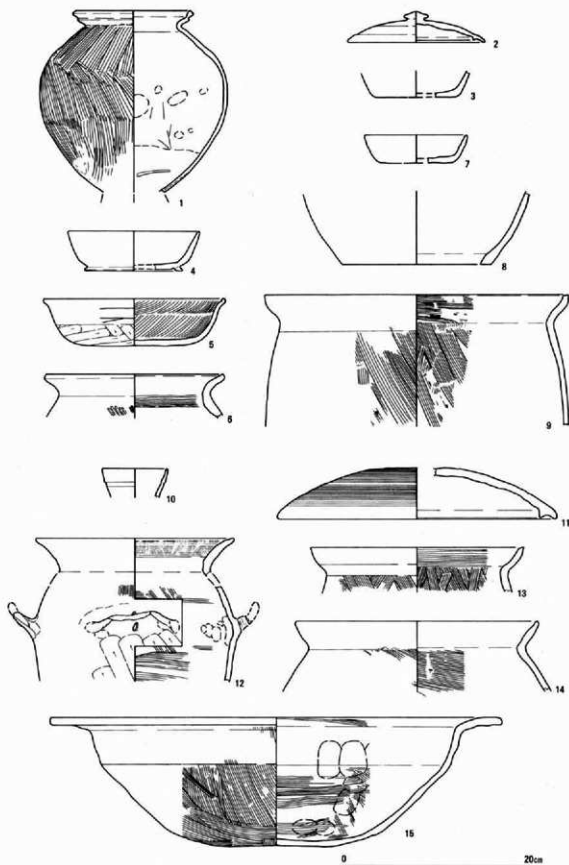
以下、図化し得た土器を遺構順・遺物包含層に分けて図示し、概観したい。

主な遺構の土器

SK1416 (第48図1、第49図) 台付カメで、東海地方西部産の土器である。口縁部は「S」字を呈し、端部は厚く作られる。いわゆるD類に属する。口径は12.1cmを測る。体部は緩やかに肩をはり、内彎しつつ底部に向かいすぼむ。体部外面には縦方向に4段に分けて粗めのハケメが施される。内面はよくナデられ、ユビオサエ・ケズリ痕をかすかに残している。また体部は暗褐色をしており、頸部に至るまで煤が厚く附着しており、二次的な加熱を行ったことがうかがえる。なお土器は底部を欠いた形で見つかり、台部は共伴していなかった。

SD1401 (第48図2・3、第50図) 2は宝珠つまみを持つ須恵器蓋で、内側に浅いかえりを持っている。口径は14.3cmを測る。3は須恵器杯の底部で、口縁部を欠く。

SD1404 (第48図4～6、第50図) 4は須恵器の杯で、溝の東端からみつかった。口径14.0cm、器高4.2cmを測る。胎土は密で表面は黒灰色、断面は白灰色をしている。焼成はかなり軟質で、底部には外にふんばる高台が貼り付けられている。5は土師器の杯で、



SK1416: 台付カメ (1) SD1401: 須恵器蓋 (2)・杯 (3) SD1404: 須恵器杯 (4)、土師器杯 (5)・カメ (6) SD1405: 須恵器杯 (7)、土師器瓶 (8)・カメ (9) SK1406: 須恵器ツボ (10)・蓋 (11)、土師器カメ (12~14)・甕 (15)

第48図 第14次調査 遺物実測図 (1)

4と並んでみつまっている。口径は19.2cm、器高5.0cmで、口縁上部は外反させた後、上につまみ端部を丸くおさめている。口縁部外面はヨコナデの後ミガキによる暗紋が数条みえ、口縁下半部以下底部までヘラケズリによる調整を行っている。内面は二段放射状暗紋が施されている。焼成は軟質で、暗黄褐色をしている。6は西側でみつかった土師器のカメである。口径18.8cmで、短い口縁部を持つ。頸部内面にはハケメが廻り、体部外面には粗いハケメがみえる。

SD1405 (第48図7~9) 7は口径10.8cm、器高3.0cmの須恵器の杯である。8は土師器の甔の底部で、底径15.8cmを測る。遺存状態は悪く調整等は不明である。9は土師器のカメで、32.2cmの口径を持つ。口縁部は内彎しつつ上を向き、体部は小さく膨らみ直線的に伸びる。口縁部内面にはヨコハケが、体部の両面にはハケメが施される。

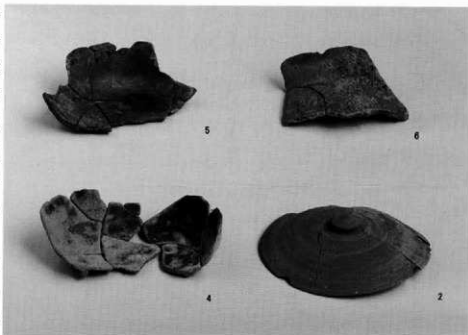
これら3本の溝の土器は8世紀初頭のものである。

SK1406 (第48図10~15、第51図) 底付近からみつかった土器である。10、11は須恵器、それ以外は土師器である。10は6.9cmの口径を持つツボの口縁部である。残存部分の中心外面に幅0.5cm程度の凹線が1条廻っている。11は口径29.8cmを測る大型の蓋である。頂部には中心



第49図 SK1416 出土遺物

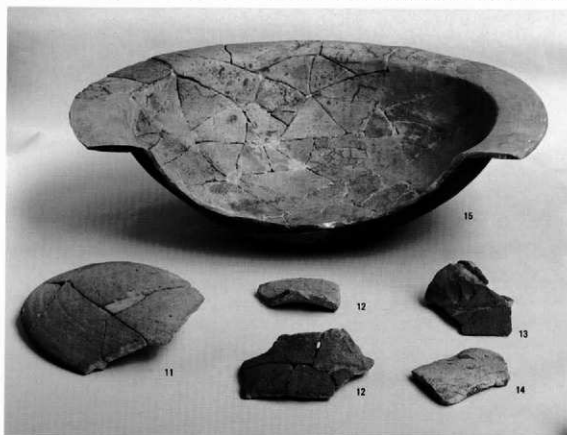
をやや外してつまみの接合痕があり、宝珠つまみが付いていたと思われる。内側には端部とほぼ同じ高さのかえりを持っている。外面には頂部から端部付近までカキメが密に



第50図 SD1401・SD1404 出土遺物

施されている。胎土はやや粗め、かなり軟質で灰色をしている。なおこの遺構からは、この蓋に対応すると思われる土器はみつかっていない。12は把手付きカメである。口縁部は緩やかに外反しつつ大きく開き、口径20.8cmを測る。内面には細かいヨコハケがされる。体部には穿孔された把手が付く。外面の調整は、把手を境に上方にはタテハケ、下方はヘラズリがされる。内面はナナメのハケの後、ヨコハケを行う。なお口縁部と体部は同一固体であるが、両者をつなぐ部分はなく、想定ラインにより復原している。13、14もカメである。13は内彎した口縁を持ち、口径22.6cm。口縁部内面はヨコハケ、体部両面には密に交差するナナメのハケメが施される。14は口径25.2cmを測る。体部内面にはヨコハケを行い、外面にはナナメハケを行う。15は外径47.6cmの鍋である。口縁部は外へ開き、半程で曲りほぼ水平となる。上面はヨコハケがされる。体部は底部から緩やかな曲線で起き上がり、頸部付近で急に立上がる。この稜を境に外面下方は長いタテハケが放射状に施され、内面下方はヨコハケが施される。稜付近に成形時のユビオサエ痕が多く残る。また外面には煤が全体に付着している。SK1406からみつかった土器類は概ね8世紀初頭の様相を持つと思われる。

SB1411 (第52図16～18、第53図) 掘立柱建物を構成する柱穴からみつかった土師器で、厚さ約0.2cmの薄手の皿である。16、17は小皿で、口径10.7cm、器高1.1cm・1.2cmを測る。



第51図 SK1406 出土遺物

手づくねで成形され、口縁部はヨコナデで外反させ、端部を小さく上につまむ。18は大口で、手づくねで成形されている。口縁部はヨコナデで外反させ、端部を小さく上につまむ。SD1402（第52図19） 黒色土器のカメである。内外面とも黒色で口縁部内面に数条のヘラミガキがみえる。以上は平安時代10世紀後半に属する。

遺物包含層の土器

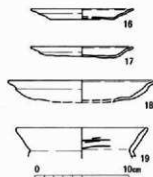
遺物包含層からは須恵器・土師器の他、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、中国製磁器、土鍾などがみつかった。以下時代順に概観していく。

古墳時代（第54図20～22） 20は口径11.7cmの須恵器杯身、21、22は須恵器高杯の脚部で、底径6.6cm、18.0cmのものである。

奈良・平安時代（第54図23～43） 23～27は須恵器の杯の高台部である。いずれも口縁部を欠いている。28～31は須恵器

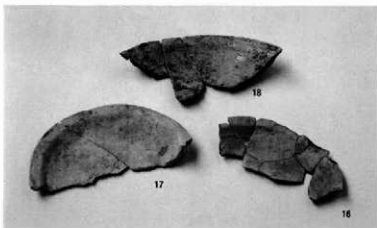
の蓋である。28は少し偏平した宝珠つまみで、29～31は口径12.0cm～16.8cmの口縁部である。32は須恵器のツボの底部である。体部は直線的に伸び、底面はヘラケズリがされている。

33は玉縁状口縁を持つ須恵器鉢で、口径19.8cmを測る。34は口径25.6cmの土師



SB1411：土師器皿（16～18）
SD1402：黒色土器カメ（19）

第52図 遺物実測図（2）



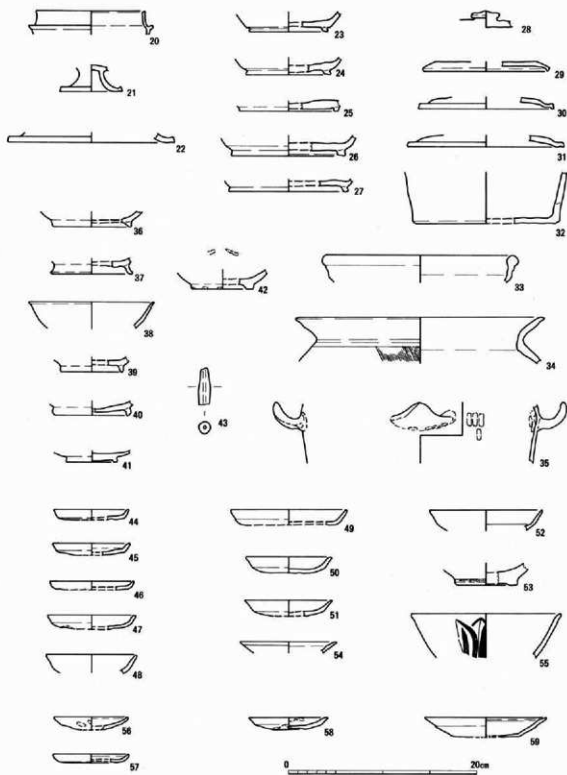
第53図 SB1411 出土遺物

器のカメである。口縁端部を面取りしている。体部外面にはナナメハケがされている。35は土師器のカメ体部で把手を持つ。把手接合部の裏面にはユビオサエ痕が残っている。

36、37は黒色土器の碗の高台部で、内面黒色のものである。38～40は灰釉陶器の碗である。体部には釉薬が施されるが、39には施釉の痕跡はみられない。38は口縁部で口径13.2cmを測る。39、40は高台部で、貼付けられたものである。41は須恵質の緑釉陶器の皿の高台部である。高台は底部を削り出してつくられたもので、胎土は灰白色をしており、体部との境の部分外面に緑釉が若干残っている。

42は中国製の青磁碗の高台部である。豊付の部分以外には濃緑色の釉薬が全面に施され、見込み部・高台端部に重ね焼きの痕跡がみえる。越州窯の製品である。

43は土鍾である。残存している長さは3.9cm、断面径1.0cmを測る。



遺物包含層：須恵器杯身 (20)・高杯 (21・22)・杯 (23~27)・蓋 (28~31)・ツギ (32)・鉢 (33)
 土師器カメ (34・35)・皿 (44~49・56~59) 黒色土器椀 (36)・皿 (37)
 灰軸陶器碗 (38~40) 緑軸陶器皿 (41) 瓦器皿 (50・51)
 中国青磁碗 (42・55)・皿 (54)、中国白磁器皿 (52)・碗 (53)、土師 (43)

第54図 第14次調査 遺物実測図 (3)

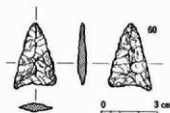
中世（第54図44～55） 44～48は土師器小皿で、口径8.0cm～9.6cmを測るものである。概ね口縁部をヨコナデし、底部は不調整、器高は1.5cmまでのものである。但し48はやや深めの皿となっている。49は土師器大皿で、口径12.2cmである。

50、51は瓦器皿である。50は口径9.0cm、器高1.7cmで、表面は淡黄灰色をしている。51は口径9.2cm、器高1.7cm、表面は灰色である。

52、53は、中国製の白磁である。52は口径12.0cmの皿で、見込み部に沈線が1条巡り、全面に緑白色の釉薬が施される。53は碗の底部で、削出しの蛇の目高台を持つ。高台は露胎で、側面には1条の削り帯が巡る。見込み部に淡褐色の釉薬が施される。

54、55は中国製の青磁である。54は口径10.2cmの皿である。直線的に伸びる口縁部付近の外面に1条の沈線が巡る。内側には顕著な稜線が見えている。淡緑灰色の釉薬が施されている。55は碗で口径15.8cmを測る。外面には蓮弁の浮紋が施され、全面に淡緑色の釉がかかる。龍泉窯の製品である。

近世（第54図56～59） 全て土師器の皿である。56は口径7.8cm、器高1.4cmで、内面はナデにより調整され、外面は不調整でユビオサエが残る。57は口径8.0cm、器高0.9cmで、底部は中心が周囲より少し高くなっている。58は口径8.4cm、器高1.3cm。口縁部はヨコナデされ、底部は中心が少し高くなる。口縁端部に煤が付着しており、灯明皿として使用されている。59は大皿で口径13.0cm、器高2.1cmを測る。器厚は薄く、ヨコナデにより口縁端部を細めている。



第55図 石磁実測図

石磁（第55図） サヌカイト製の大型品である。弥生時代に属すとみられる。

（4）小 結

第14次調査でみつまっているのは、古墳時代の小土坑、飛鳥時代の土坑・溝、平安時代の溝・掘立柱建物跡、中世耕作溝と各時代にわたる遺構である。第13次調査と比較すると、遺構の密度・遺物の量ともかなり少ない。数段低い立地によるものと思われるが、北では更に低い東側にも遺構が存在することから、集落の周辺部であると考えられる。

古墳時代の小土坑や飛鳥時代の土坑という早い時期の遺構は、南側の一段高いところでみつっており、密度はうすいがさらに南方へ展開する可能性はあろう。

道路側溝からみつかった土器は、奈良時代よりも飛鳥時代的な様相が強い。つまり、道の整備イコール土地の区画割は飛鳥時代に行われたものと考えられる。従って、官道を先に通し、後に官道を基準に周辺を区画割したと考えていることから、この付近で奈良時代の山陽道とみられる道は飛鳥時代には一定の整備がなされていたことになる。

なお、側溝からはそれ以降の土器がないこと、周辺に奈良時代の遺構がないことから区画整備されたものの、土地利用があまり進まなかったことがわかる。

平安時代に入り、過去の北側の調査や第13次調査で見ついている建物跡群はここまで広がっていたようである。建物跡の柱穴内からは土師器皿や黒色土器のほか、瓦・緑釉陶器・灰釉陶器などがみつき、上層の遺物包含層からは、越州窯製の青磁碗が出土していることなど、かなりの有力者層の居館か官衙的な性格をもつ集落であったようである。

しかしながら中世以降になると、この地域一帯は耕作地として利用されて現在に至っている。この時期に土地利用の変換を行う契機があったと考えられる。

6. まとめ

第13次・第14次の2つの調査では、古代から中世にわたる多くの遺構・遺物がみつかった。これら成果を時代毎に整理しまとめとしたい。

縄紋時代 排土からではあるが、石畿がみつかった。晩期であろうか。

弥生時代 遺物包含層から石畿がみつかった。

古墳時代 小土坑 SK1416から東海地方西部産のS字口縁の台付カメ、溝状遺構 SD13150から布留式土器のカメがみつまっている。集落をうかがえる遺構はみつからなかったが、付近に存在が予想される。

飛鳥・奈良時代 飛鳥時代では、落ち込み SX1382、土坑 SK1406がみつまっている。SX1382は自然の流路の落ち込みと思われ、内部から飛鳥時代の特色を持つ土器が多量にみつまっている。消費された土器が流れ込んだと思われ、SK1406でも大型の鍋などがみつまっている。残りの良いことから近くで使用されたものようである。

『続日本紀』の和銅4年(711)の条にみえる山本駅は、山陽道に置かれた駅であり、その場所は市内の三山木地区の山本集落付近に推定されている。この設置記事は、この時に道・駅ともに完成したものとされる。古代の山陽道に平行・直交すると考えているSD1401・SD1404・SD1405からみつかった土器は、飛鳥時代的な土器であり、この記事内容を考古学的に裏づけたものと理解できよう。

井戸 SE13113からは、廃棄に伴う祭祀に用いられたと思われる墨書土器がみつまっている。北側の第8次調査でも同じく墨書土器や祭祀遺物を伴う井戸は2例みつかり、興戸遺跡の性格を表わしている。

平安時代 遺構では、この時代の方向と考えられる約N24°Wの傾きを持つ溝 SD1301・SD1305、SD1402と、掘立柱建物跡 SB13201・SB13118・SB13114、SB1411がみつまっている。但しSD1305はSB13114に一部切られており、清廃絶後に建築されたことがわかる。遺物では土師器皿が、SB13114とSB1411の柱穴からみつまっている。ともに柱抜き穴であり、一種の祭祀が行われたことがわかる。このほか遺物包含層からは、土師器・須恵器・黒色土器をはじめ、越州窯青磁、緑釉陶器、灰釉陶器など一般的ではない土器もみつかり

ており、有力者層集落の存在が考えられ、奈良時代に引き続き地域の中核となっていたようである。

中世・近世 平安時代後半には、地域の中核が移転したようで、徐々に耕作地として利用され始める。遺物包含層からは、土師器・瓦器のほか中国製の青磁・白磁もみつかったことから、有力者は近隣にいたと思われる。中世の早い段階ですでに耕地化したようで、以降耕地として現在に至っている。

今回の調査成果は以上であるが、特に奈良時代の山陽道の存在を示す道路と側溝やその整備年代が明らかになったことは今回の大きな成果である。また、この地域に大量の土器を消費し、祭祀を行う集落＝官衙関係施設の存在を示す遺構がみつかり、平安時代では有力者の集落の一部とみられる掘立柱建物群などがみつかったことは、今までの調査成果を補強し、より遺跡の性格を明確にできたと考えている。

従来からいわれる遺構の時代毎の方向特性などは、遺物を伴わない遺構の時代を推測する手掛かりとなり、古代の興戸地域の景観復原に大いに活用できるものとして、今後の調査に活かしていきたい。

＜参考文献＞

- ・伊賀高弘「興戸遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第27冊 ①京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- ・伊野近富「興戸遺跡第6・8次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第42冊 ①京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
- ・伊野近富「興戸遺跡第11次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第47冊 ①京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- ・古代の土器研究会編『古代の土器1』・『古代の土器2』1992・1993
- ・田辺町教育委員会『田辺町埋蔵文化財調査報告書第15集』1992など

報告書抄録

ふりがな	こうどいせきだい13じ・だい14じはっくつちょうさがいほう							
書名	興戸遺跡第13次・第14次発掘調査概報							
副書名								
巻次								
シリーズ名	京田辺市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第25集							
編著者名	鷹野一太郎・五百磐顕一							
編集機関	京田辺市教育委員会							
所在地	〒610-0393 京都府京田辺市田辺80番地							
発行年月日	1998年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
興戸遺跡 第13次	京都府 京田辺市 興戸犬伏 23-1	26342		34° 48′ 38″	135° 46′ 31″	1996年 7月12日 ～ 10月2日	350	共同住宅 の建設
	興戸八木屋 17-3			34° 48′ 35″	135° 46′ 35″	1997年 7月30日 ～ 10月3日		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
興戸遺跡 第13次	集落跡	古墳時代 奈良時代 平安時代 中世	溝 井戸・溝 掘立柱建物跡・溝 溝		布留式土器・土師器・ 須恵器・墨書土器・黒 色土器・緑釉陶器・灰 釉陶器・青磁・白磁・ 瓦器・木製品・瓦・土 馬・乾元大宝・土鍾・ フイゴ羽口・鉄滓・石 鏝		墨書土器の入っ た奈良時代の井 戸 平安時代9世紀 の集落跡	
第14次	集落跡	古墳時代 奈良時代 平安時代 中世	土坑 道と側溝 掘立柱建物跡・溝 溝		S字口縁台付カメ・土 師器・須恵器・黒色土 器・緑釉陶器・灰釉陶 器・青磁・白磁・瓦器・ 瓦・土鍾・石鏝		古代山陽道に直 交・平行する道 と側溝	

平成10年3月30日 印刷

平成10年3月31日 発行

興戸遺跡第13次・第14次発掘調査概報

(京田辺市埋蔵文化財調査報告書 第25集)

編集・発行 京田辺市教育委員会

〒610-0393 京都府京田辺市田辺80番地

電話 0774-62-9550

印刷 明新印刷株式会社

〒630-8141 奈良市南京終町3丁目464番地

電話 0742-63-0661